

## 『野ざらし紀行画卷』の表記特性

著者	濱 森太郎
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	5
ページ	61-75
発行年	1994-05-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/6472">http://hdl.handle.net/10076/6472</a>

# 『野ざらし紀行画卷』の表記特性

濱 森太郎

## 〔要旨〕

画卷本では、本文を漢字化するとともに、単語の語幹・語尾に使用する仮名字母を統一することで、規則性が高く、かつ読みやすいテキストを実現した。こうした仮名字母の規則的な集中利用と、単語表記の著しい規則性と同居するところに画卷本の面目がある。

## 一 はじめに

常識的に見れば、卷子本の目的の半分は書美の追求であり、画卷本の目的の大部分は美術品の製作にある。同じく、版本の目的の半分は商品の製造にあり、写本の目的の大方は家用テキストの保蔵にある。メディアとその目的の違いが生み出す表記・表現の相違に気付いたとき、『野ざらし紀行』はまったく別の顔を現出するだろう。

## 二 「画卷本」の字母の集中利用

「天理本」（卷子）から「画卷本」（画卷）への推敲過程には、二十種の仮名字母の変更があった（注1）。しかも、この二十種の仮名字母の変更には、書き易く読み易い仮名字母を選び、その字母を集約的に用いる用字意識が認められた。この仮名字母の変更によって、芭蕉は「天理本」に見られた複数の汎用字母（修辭上、格別制約なく汎用される仮名字母）の併用状態を解消するとともに、汎用字母の性格を失った各字母の用途を限定し、行頭・行末・文節・語頭・語尾・活用形を表示する文字として特殊化したのである。

これをさらに、汎用字母の性格を失った字母（表一）の用途に限定して言えば、それは、書体・字体を統一し、読み易く書き易いテキストを作りだそうとする啓蒙的な意志により、行頭・行末から文節・活用に至る、表記の細部を精細に秩序付けるために用いられたとも言える。

私は、この表記の細部を精細に秩序付ける表記意識の一端を再現することで、画卷の詞書として書かれた画卷本の

表記の特性について述べたいと思う。  
さて、今、その表記の細部の精細な秩序の一端を示すために、まず、画卷本の字母の特徴部分を示せば、次のようになる。

表一「画卷本」の特徴となる仮名

☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	NO				
16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
		○	○	○								○	○		
り	む	ほ	ふ	ひ	ね	に	な	と	て	た	せ	す	け	き	あ
利	武	本	不	比	年	尔	奈	止	天	多	世	寸	遣	幾	安
		・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
		無	保	婦		仁		登				春	希	支	
		・				耳							介		
		舞													

☆	☆	☆	☆
20	19	18	17
ん	を	れ	る
无	遠	礼	留
		・	連

※☆印は、一字母が集中して用いられた例（二字母が八五%を占める状態を言う）。

※○印は、二つ以上の字母が併用される仮名

「表一」の通り、「画卷本」で新たに集中利用され始めた仮名字母は十三字（☆印）。また、「画卷本」に至って主要字母が交替したもの（○印）七字（注2）。この七字の内、「け」「す」「ふ」「ほ」「む」の五字には、複数字母の併用があり、さらに、残る「と」「に」にも、複数字母の併用が見られる。恐らく後者の二字は、助詞「と」「に」の形で大量に反復使用されるため、表記の交替が必要だったものと推測される（後述）。

次に、この二十字の中から、汎用字母から外れた字母を拾い、その限定的な用法を整理すると、次のようになる。

表二 推敲に伴う仮名字母集中利用の原因

2	1	NO
け	き	仮名
遣18 (汎用 *注3)	支1 (装飾1)	画卷本の 用字法

13	12	11	10	9	8	7	6	5	3
る	む	ほ	ふ	に	な	と	て	た	す
流2 (装飾2)	舞4 (装飾・語尾4)	本10 (汎用)	婦5 (装飾5)	耳19 (助詞に19)	仁30 (語尾30 注5)	那1 (装飾・句末1)	登13 (装飾・語頭13)	帝2 (装飾2)	堂3 (装飾・語頭3)
								春5 (装飾5)	

※表内の数字は、用例数  
※無印は、主流となる字母が交替した例

例えば、常に語頭にあつて、「堂(た)き物」「堂(た)とり」「堂(た)り」や「登(と)くとく」「登(と)」「(助詞十一例、注4)のごとく、語頭を表示する「堂」「登」は、偶然とは考えにくい。また、語尾にあつて、「とも仁(に)」「ながら仁(に)」「仁(に)」「(助詞二四例、注5)や「云け舞(む)」「舞(む)」「(助詞三例、注6)のごとく、文節の句切れを表示する「仁」「舞」も偶然とは考えにくい。さらに、常に助詞「に」を表示する「耳」や、「婦(ふ)かき心」「山婦(ふ)かく」「婦(ふ)かく分出る」等、形容詞「ふかし」の「ふ」を表示

する「婦」もある。これらは、使用字母を統一し、簡便な表記のテキストを作り出そうとする意志のもと、文節から単語・活用に至るまで、表記を精細に秩序付ける表記意識の存在を暗示するものである。事実、もく数回程度の繰り返しを規則的と呼んで良いなら(一作品で数回繰り返される語彙は、収録語彙全体の八十%を占める)、規則的な用字はたちまち多数に登るのである。

### 三 「画卷本」の表記の特徴

そこで、画卷本の詞書を単語別に分類すると、たちまち見えることが一つある。例えば動詞「あり」の表記は、次のように整理されている。

- ① あら 安良(用例4)・あり 安利(用例1)・あり有(用例8)・ある 安留(用例1)・あれ(用例〇)
- 加えて、表記の規則性を重視し、反復使用される回数が多い活用語の実例をさらに上げれば、例えば、動詞「いう」は、次のように整理されている。
- ② いは 以者(用例1)・いひ 以比(用例1)・いふ 云(用例8)・いへ 以部(用例2)
- さらに、形容詞「ふかし」、助詞「より」も、次のように整理されている。
- ③ ふかき 婦可幾(用例1)・ふかく 婦可久(用例3)
- ④ より 与利(用例8)
- いずれも、単語の表記が語幹・語尾ともに統一され、規

則的に繰り返されるために、書き易くかつ読みやすいテキストが実現されているのである。

こうした仮名字母の規則的な集中利用と、表記面の著しい規則性が表裏する事は重要である。表記面を極力合理化する意志と規則的な文脈を作り出す意志とが同居するところに画巻本の面目があるからである。要するに、この画巻本に於いて初めて、多くの単語が、現在通用の仮名表記のように、一仮名一字母に近づく形で表記され始めるのであって、これには恐らく芭蕉の意志であると共に、画巻というメディアが、詞書に盛大なデコレーションを必要としなかったことも作用したに違いない。

だが、画巻本の表記の特色は、それだけではない。画巻本の表記をさらに単語別に検索すると、特に、陳述を表示する助詞・助動詞に、やや装飾性の高い字母が採用され、結果的に複数字母が併用される事例が散見されるからである。それを今、一括して表示すると、次のようになる。

表二 複数字母の併用が顕著に現れる語彙

単語	使用字母
かな	可那(1) 哉(11)
けり	介利(1) 介留(1)

は	の	にて	に	なり	と	て	たり	ぞ	ず	けん	
ハ(4) 盤(15)	乃(73) 能(35)	仁天(1) 丹天(1)	丹(1) 尔(71) 仁(24) 耳(18)	奈良(3) 奈留(1) 奈礼(1) 奈連(1)	止(9) 登(11)	天(67) 帝(2)	多利(4) 多留(8) 多礼(1) 太留(1) 堂留(1)	曾(2) 楚(4)	春(2) 寸(7)	遣舞(1) 遣无(1) 希無(1)	遣流(1) 遣留(10) 希流(1) 希連(1)

む	を	る	ば
舞(3)	越(6)	礼(4)	ハ(4)
無(2)	遠(54)	連(1)	者(6)
无(6)			

これら十七の助詞・助動詞は、切れ字の機能を持つ助詞・助動詞「かな」「けり」「けん」「ず」「ぞ」「たり」「なり」「る」「む」と、通常の助詞「て」「と」「に」「にて」「の」「は」「ば」「を」とに、二分することができる。

そして、その内、文中に多用される通常の助詞の字母の併用については、次の三つの理由が考えられる。

①使用頻度の高い字母であるため、近接して用いられることも多く、字母に変化が必要だったこと。

例 とくくと「登久く登・止久く」

②文字配列上、助詞は、一行の最下位または最上位に用いられることが多く、勢い、行頭・行末の装飾を分担する必要が生じること。

例・助詞「に」を表示する「耳」「仁」「尔」の三字の内、行末に位置する「に」は「耳」六〇%、「仁」

四十六%、「尔」六%と偏っている。  
必ず行末に配置される助詞「ば」には、「ハ」「者」の二種類の字母が用いられる。

③助詞の字形は前後の文字に影響されることが多く、それに対応して二種類以上の字母が必要とされること。

例・漢字に続く「に」は、概ね「耳」と表記される。

・漢字に続く「の」は、概ね「乃」と表記される。

・漢字に続く「を」は、概ね「遠」と表記される。

さらに、この外、係り助詞「は」は、「盤」と表記され、助詞「ば」は、「者」と表記されるなどの事例もある。これらの多用な事例が皆、複数の仮名字母が併用される理由となるのである。

加えて厄介なことは、これら運筆、修辭、文法上の種々の理由が皆、書き易く、読み易く、かつ美しいテキストを作ろうとする筆者の美的な判断に由来することである。言い換えれば、画巻本の表記の合理化は、筆者の美意識の納得と共に始まらなければならなかったのである。  
だが、厄介なことはそれだけではない。

#### 四 「画巻本」の本文装飾

「画巻本」に生じた字体並びに表記の統一は、さらに微妙な課題を招来するように思われる。例えば、表記の合理化が、筆跡の単調さを生み出すことは当然予想される。が、しかし、筆墨をもって生計を立てる俳諧師なら誰しも思う

ように、読み易く書き易いテキストは、決して単調・平板なテキストであってはならない。文学意志が生み出した文節・単語・活用に至る表現細部の核心をさり気なく強調表示する、新しいタイプの紙面装飾法が考案されなければならないのである。

もとより、今、装飾の対象が画巻である以上、鑑賞の主力は絵であって、詞書ではない。その詞書の表記の過大な装飾は、かえって読者の注意力を分散させ、絵の表現効果を削減するだろう。さり気ない文字が、しかし、しっかりと秩序付けられ、筆者の意志の核心を表示する表記法が望まれるのである。

この点、画巻本では、表記を漢字化するとともに、単語の語幹・語尾に使用する仮名字母を統一することで、規則性が高く、かつ読みやすいテキストを実現した。こうした仮名字母の規則的な集中利用と、単語表記の著しい規則性とは同居するところに画巻本の面目があったのである。

だが、一方、画巻本には、語り手の陳述を強調表示するために、助詞・助動詞に複数字母を併用する事例が散見される。また、行頭・行末を強調表示する字母、文末・文節・単語を強調表示する字母もある。それらの字母は、文字の統柄、頻繁な反復使用、表記のバリエーションを勘案して取捨選択されるが、それが偶然以上の規則性を備えていることは先に指摘した通りである。

そこで、今、その規則的な表記意識をさらに詳細に観察するために、試みに、画巻本のテキストから占有率十五%

以下の仮名字母の使用箇所を抽出すると、次のようになる。  
(注7)

表三 「画巻本」の装飾文字の利用箇所  
(占有率十五%以下)

位置	本文	単語	フレーズ
江戸	を越	を	野さらしを心に 却て江戸を指故郷
箱根	を越	を	霧しくれ富士をみぬ日 何某ちりと云けるは 芭蕉を富士に預行
富士川	を越	を	富士川のほとりを行に あすやしほれんと 捨子に秋の風いかに 母にうとまれたるか
大井川	に耳	に	道のへの木槿は馬に 木槿は馬にくはれけり
小夜	に耳	に	馬上に鞭をたれて 茶のけふり
中山	け介	けむり	



江戸	甲斐	名古屋	尾張	水口	唐崎	京都
に耳に	に耳に	に耳に	に耳に け介 けり なみだ	に丹 ツツ 太たり	に丹 なり	に耳連る に耳に な那かな
庵に帰りて つかれをはらすほとに	山中に立よりて	東に下らんとするに	行脚しけるに 其角か許へ申遣しける 卯花拜むなミた哉	水口にて 命二ツの中に生たる 生たる桜哉	松は花より臙にて	京にのほりて 昨日ふや鶴を盗れし 花にかまはぬ姿かな 花にかまはぬ姿かな

内訳で言えば、語り手の陳述を表示する助詞・助動詞は七語、四十一例。各語の用例数は、「に」一九、「を」六、

「けり」五、「なり」三、「たり」二、「て」三、「の」一、「かな」一、「べし」一、「る」一。

また、旅中の出来事を表示する単語は、二十二語、二十四例。内訳は、「しほる」「けふり」「かく」「ほのくらし」「かへさ」「たきもの」「しばらく」\*「おおいさ」「ひく」「たどる」「うずむ」「わけいる」「へだつ」「たふとし」「ほととぎす」\*「おおいに」「こころ」「とどまる」「す」「ありく」「ふたつ」「なみだ」のごとく、いずれも各一例で、特定の語や特定の語頭・語尾が装飾されるわけではない。強いて言えば、語頭・語尾の強調表示がやや目立つ程度の簡素な文字使いと言える。また、この強調表示は、恐らく、文脈の起伏や文節の切れ続きを表示する意図を持つだろう。

ただ、中には、\*「大イニ」「大イサ」のごとく、片仮名の送り仮名が装飾字母にカウントされるために、抽出された例もある。

だが、この場当たり的な語彙選択・用字選択にも関わらず、語り手の陳述を表示する「に」以下の助詞・助動詞の表記には、それぞれ興味深い規則性が隠れている。

①「に」は、『画卷』では「尔」「仁」と表記される。ただし、漢字に続く「に」は「耳」と表記される。

(ここでは、三例の例外が含まれる。例外にあたる三例は、いずれも行末にあり、行末の強調表示に用いられたものと推測される。)

②「を」は、通常(注8)「遠」と表記される。また、

は漢字の後の「を」には「遠」が用いられ、漢字の前の「を」には、「越」が用いられる。(ここでは、二例の例外が含まれる。一例は行末の強調表示に用いられ、他の一例は、漢字に続く「を」の表記に用いられる。

③「けり」は通常「遣利・遣留・遣礼」と表記される。ここでは、「くはれ介利」「申遣し介留」「とまり遣流」「暮希連ば」等、いずれも、文末(かつ行末)にあって、文脈の終結を強調表示する。(例外にあたる「云希流は」の「希」は、漢字に続く「け」の表記に用いられる。

④「なり」は、通常「奈良・奈利・奈礼」と表記される。ここでは、「春奈連や」「驢丹て」等、切れ字の前に位置し(または切れ字的に働き)文脈の終結を表示する。

⑤「多利」は通常「多利・多留」と表記される。ここでは「生太留桜哉」「うとまれ堂留か」等、文末にあって文脈の終結を強調表示する。

⑥「て」は、通常「天」と表記される。ここでは、「と云帝」「とのみ云帝」等、漢字の後または行末にあって、登場人物の陳述の終結を強調表示する。

⑦「の」は、通常「乃」と表記されるが、ここでは、「一ノ華表」と片仮名で表記される。「華表」と相まって漢籍の送り仮名に似た雰囲気暗示する。

⑧「かな」は通常「哉」と表記されるが、ここでは「姿可那」と仮名字母で表記される。漢字の重複による句末の重くれた文字使いを避けるための文字選択か。

⑨「べし」は、用例一例のため、表記傾向の有無によらず、

要するに珍しい表記に相当する。

⑩「る」の連用形は通常「礼」と表記されるが、ここでは「鶴を盗連し」と表記される。文末(切れ字の前)に位置し、主人公の陳述の終結を表示する。

さらに、これら各助詞・助動詞の表示箇所を鳥瞰図風に眺めれば、装飾的な字母が、『野ざらし紀行』の要衝たる「箱根」「富士川」「伊勢神宮」「西行谷」「当麻寺」「吉野山」「熱田神宮」「故郷」「京都」「水口」「尾張」に集中し、ことに「吉野山」「熱田神宮」に濃いデコレーションの痕跡が見える。このデコレーションは、恐らく、「大和行脚」に始まり、「吉野入山」「吉野出山」と続く「回国修行」の日々がこの作品の骨格であることを示唆したものである。加えて、「西行谷」の「蝶女」の逸話と「京都」の秋風訪問の持つ意味の大きさも、ここに暗示されているのではあるまいか。蝶女の袖の断片(富山奏氏蔵)に記された芭蕉の懇情や山荘滞留を許可した三井秋風への謝意の持つ意味を再考する必要があるだろう。

この装飾字母を用いた芭蕉の強調表示法は、さらに諸本によって、比較検討する必要があるだろう。その比較検討を通じて、芭蕉の強調表示法が確認されるときに、その個性と普遍性とが明らかになるからである。

五 泊船本の強調表示法

さて、そこで最後に、取り急ぎ、泊船本のテキストからやはり占有率十五%以下の仮名字母を抽出し、表にして掲げた。

表四 泊船本の裝飾文字の利用箇所(占有率十五%以下)

位置	江戸	箱根
本文	けむにむけ 遣仁里 り登と スス	はなな 盤那那 りトト け遣遣 り那那
単語	けんけん けんけん にに さむげなり ととせ さす	はみな ちり けり なる かな あずく ちり
フレーズ	無何入といひけむ 無何入といひけむ むかしの人の杖に そゝろさむ気なり 秋とせ却而江戸を 却而江戸を指す故郷	関越る日は 山みな雲にかくれけり 何某千リトひけるハ 何某千リトひけるハ 何某千リトひけるハ 路のたすけとなりて 朋友に信あるかな此人 芭蕉を富士に影ケ行 千り

小夜	大井川	富士川
のすた 能寸太	りは盤 里	けはムににせかすけしすけりたにしかり 気盤ム仁仁勢加寸計志寸希里堂仁志加
のずたる	ちり	なくはににいかかかすてなしおるあすけんばかり にくむににかにかぜかぜすてごなぐしおるあすけんばかり
馬の上にむちをたれて 数里いまた鶏鳴ならず 杜牧か早行の残夢	大井川越る日は ちり	三つはかりなる捨子の 此川の早瀬にかけて 浮世の波をしのくに 浮世の波をしのくに 波をしのくにたえず 露はかりの命まつ間と 命まつ間と捨置けむ あすやしほれんと あすやしほれんと 喰物なけてとをるに すて子にあきのかぜ あきのかぜいかに あきのかぜいかに あきのかぜいかに ちゝにくまれたるか なんちを悪ムにあらし 母は汝をうとむに 性のつたなきをなけ

	故郷	茶店	伊勢宮神
まへま 遍満	なしものたはての 那志茂農堂盤帝農	り 里	ののののの み能農仁へ 美能農仁へ
べし とどまる	なくしはらく ものだに	たちよる	ののののの ののののの みそか
かくすとまりて いふへけん	しはらくなきて なんちか眉もや はらから鬢白く 今は跡たになし 今は跡たになし はらから鬢白く しはらくなきて しはらくなきて	茶店に立よりけるに	伊勢に有けるを 俗に似て髪なし 浮屠の属にたくへて 浮屠の属にたくへて 浮屠の属にたくへて 暮て外宮に詣侍りける 一の鳥井の陰 峯の松風身にしむ みそか月なし 千とせの杉を抱あらし

	吉野	竹ノ内
むあすか 舞阿須加	ののののの 能農計加 は盤能農計 か加仁舞	のたのひに 農仁太農飛仁
んあらう あらう	はのののの はのののの かわる すすぐ	のひに たりひく ののののの
耳をあらはむ	耳をあらはむ うき世すゝかはや かハらすとみえて 彼とくゝの清水は 彼とくゝの清水は 柴人のかよふ道のミ 二町はかりわけ入程 ある坊に一夜をかりて ある坊に一夜をかりて	仏縁にひかれて 仏縁にひかれて 斧斤の罪をまぬかれ 罪をまぬかれたるそ 幸にしてたつとし 幾死かへる法の松 たとりけるに まことに山深く 烟雨谷を埋んで 西に木を伐ル音 院の鐘の声 むかしより此山に入て 詩にのかれ哥にかくる 唐土の慮山といはむも ある坊に一夜をかりて ある坊に一夜をかりて

神熱 宮田	本 当 寺	大 垣	常 盤 塚	
まもにしのニイツ 満母仁志農ニイツ	けにす 計仁須	けもに 遣母仁	のはる 能盤流	しのにニ 志農ニ仁
よもぎ とまる	あけほの	けり おも	のは たり	しのに のす のぶに
心とまりける 神と名のよもぎ	あけほのや 千鳥よ雪のほととぎす またほのくらぎ中に	旅立ければ 大垣に泊りける夜は 心におもひて	心似たる秋風とは 似たる秋風とは 心に似たりあきの風	山を登り坂を下るに 秋の日既二斜になれば 先後醍醐帝の御陵を しのふハ何をしのふ草

	水 口	滋 賀	京 都	奈 良	故 郷	名 古 屋	
もしの 母志能	ツツ	け計	に仁	のり能	かな那 カカ	るにス 流ニス	し志
ともすの	ふたつ	いく	に	のみずとり	がながら	しぐる	しのぶ
いざともに 行脚しけるに	命ニツ中に活たる	つゝしいけて	京に登りて	水取りや 水の僧の沓の音	誰力婿そ わらちはきながら	犬もしくるゝ敷 狂句麻の身ハ 麻の身ハ竹斎ニ	しのふさへ枯て餅かふ 名護屋に入ル道の程 飄吟ス



助詞・助動詞の強調表示が、全体の五〇%を占める。が、それ以上に、旅中の出来事を表示する名詞・形容詞・動詞等の強調表示が増加し、これが全体の五〇%を占める。両者ともに強調表示されることで、自立語・付属語の境界や、付属語を境にした文脈の起伏・切れ続きがより明瞭に表示されることは変わらない。ただ、表示部のウエイトが、語り手の陳述から旅中の出来事に移っているのである。

加えて、『野ざらし紀行』の要衝にこれら裝飾字母が集中する様子にも変りはない。すなわち、ここでも裝飾字母は、『紀行』の要衝、「箱根」「富士川」「伊勢神宮」「西行谷」「当麻寺」「吉野山」「熱田神宮」「故郷」「京都」「水口」「尾張」に集中し、ことに「吉野山」「熱田神宮」に濃厚なデコレーションが施されている。この裝飾は、恐らく「大和行脚」に始まり、「吉野入山」「吉野出山」へと続く「行脚」の日々がこの作品の竜骨であることを継承するものと思われる。

だが、この両書には、明らかな相違もある。一つは、『紀行』の要衝以外にも、裝飾文字が幅広く分布すること、もう一つは、「西行谷」の「蝶女」の挿話と「京都」の三井秋風訪問（複数の裝飾字母を用いて強調表示されていた）の重要さを暗示する裝飾字母が消えていることである。絵を欠く泊船本で、紙面裝飾のために、一定量の裝飾字母を半ば自動的に文中に配置する必要があることは言うまでもあるまい。だが、「西行谷」の「蝶女」の挿話と「京都」の三井秋風訪問の件は事情が違っている。これは芭蕉の指

示か、清書者の私意か。

こうした字母の変化が究極的に何を意味するかは不明だが、いずれ、更に詳細な表記の調査が必要になるだろう。要するに今は、表記の洗練を目指して、用字の整理統合を進める陰で、さらに繊細にテキストの要点を表示する、もう一つの用字法が工夫されていたらしいことを示唆することが目的である。

## 六 おわりに

以上、要するに画巻本に於いて初めて、多くの単語が、現在通用の表記のように、一仮名一字母に近い形で表記され始めた。これには恐らく、本文の整理統合を急ぐ芭蕉の意志に加えて、画巻というメディアが詞書に盛大なデコレーションを必要としなかったことも作用していたに違いない。また、画巻本の表記を単語別に検索すると、特に、陳述を表示する助詞・助動詞に、やや裝飾性の高い字母が採用され、結果的に複数字母が併用される事例が散見される。その内、切れ字機能を持つ助詞・助動詞の使用字母のパライティについては、それが語り手の陳述の核心に当たるため、特に意を用いて、強調表示を心掛けたものと推測される。

次に、泊船本では、この裝飾字母の分量が大幅に増加している。これは、語り手の陳述の詳細を強調する助詞・助動詞の強調表示に加えて、旅中の出来事を表示する名詞・

形容詞・動詞等の語頭・語尾の強調表示が増加したことに  
よる。さらに「西行谷」の「蝶女」の挿話と「京都」の三  
井秋風訪問の重要さを暗示する装飾字母が消えている。  
こうした装飾字母の変化が何を意味するかは今の所不明  
だが、いずれ更に、詳細に調査する必要があるものと思  
われる。

注1 拙稿「文字の修辭学―『野ざらし紀行画卷』推敲  
の一側面―」（『三重大学日本語学』4号）参  
照。

注2 天理本から画卷本に至る推敲過程を言う。通説で  
は、天理本・泊船本・孤屋本・画卷本の順に推敲さ  
れたとされているが、私は天理本・画卷本・泊船本  
の順に執筆されたと考えている。

注2 『野ざらし紀行』の諸本の仮名字母の使用状況を  
分析すると、集中して使用される仮名字母は、集中  
率八五%以上のところに分布し、希に装飾的に使用  
される仮名字母は、占有率十五%以下のところに分  
布するために、このような基準を用いた。なお、集  
中率とは、一つの仮名を表記する際に用いられる当  
該仮名字母の占有率を言う。

注3 「遣」は、画卷本に至って汎用字母として用いら  
れた字母。新たに汎用性を持って用いられ始めた点  
で珍しい事例のため、例外的にここに掲げた。

注4 「登」十三例の内には、助詞「と」十一例が含ま

れるが、全体を一括して表示するために、表ではこ  
のように集約した。

注5 「仁」三〇例の内には、助詞「に」二四例が含まれ  
るが、全体を一括して表示するために、表ではこの  
ように集約した。

注6 「舞」四例の内には、助動詞「む」三例が含まれる  
が、全体を一括して表示するために、表ではこのよ  
うに集約した。

注7 十五%の根拠は、一字母毎に使用字母の占有率  
（一仮名を表記する際に用いられる複数字母の使用  
回数比率）を観察すると、この十五%以上の仮名  
字母と十五%以下の仮名字母との間に比較的大きな  
格差があることによる。

注8 通用の仮名字母については、「川柳の仮名一國  
語字体史の視点から―前田富祺」（『日本語・日本  
文化研究論集』4号）、木越治「近世文学作品にお  
ける字母の用法について―『ますらを物語』『おく  
の細道』『教訓私儲育』の場合―」（『国語文字史の  
研究一』前田富祺編、九二・九月 和泉書院刊）によ  
った。ただし、この場合は、『野ざらし紀行』の主  
要諸本で一般に用いられる字母の意味で用いた。

注9 「泊船本『野ざらし紀行』の表記特性」（『国文  
学放』一四一号、九四年三月刊、所収）参照。

注10 この清書者は恐らく「泊船本」が収められた『泊  
船集』の編者風国かと推測されるが、確証はない。

「本学教官」